



水野地区・上水野

水野は上・中・下の3村に分かれていますが、その歴史は中世まで遡ることができます。上水野には江戸時代に御林方奉行所が置かれ、尾張藩の林地管理の中心を担っていました。北側には曾野稻荷で有名な曾野が枝村としてあります。



御林方奉行所跡



「水野御案内者」として尾張藩に召し出された水野氏は、狩場や水野御殿の管理の他に藩林地（御林）の支配もあわせて行っていました。五代將軍綱吉の「生類憐みの令」により狩猟の規制が行われると、御林支配が主体となり、享保元年（1716）に御林方奉行職に任ぜられます。その後、元文5年（1740）に水野御殿敷地に御林方奉行所が置かれたと考えられています。御林方奉行所では愛知郡、春日井郡、知多郡の御林の管理を行っていました。主な職務としては植林、伐採、枝下し、下草刈り、諸普請への材木の供給、土取りの許可などがあり、現在の山林管理とほぼ同様な業務を行っていました。現在、屋敷地は民家となっていますが、周辺の林地は当時の姿を残しています。



北脇の大棕



水北町では大イチョウと並んで目を引く大木です。樹高は20m、樹冠は傘を架けたように枝を垂れ、優しい樹形をしています。樹齢600年ともいわれる老木です。このムクノキの下には阿弥陀堂があり、薬師如来が祀られています。寛政4年（1792）の村絵図でも、北脇嶋の西に「ミダ堂」が描かれています。



陶器



石器



創造



街



交流



自然



祭り

感応寺



臨済宗妙心寺派の寺院で、寺伝では天平 6 年（734）に行基によって開創、地名の小金にちなんで山号を小金山と称し、行基作の雨乞観音が感応仏と呼ばれたので寺号を感応寺としたとあります。当初は天台宗でしたが、慶長 5 年（1600）に才庵によって中興された際に臨済宗妙心寺派に転じています。本堂に安置してある本尊聖観音は恵心僧都の作と伝えられ、元禄 7 年（1694）作の開山行基菩薩木牌長歌、小金山景和歌が寺宝としてあります。

曾野稻荷社



水野村上水野村曾野に曾野稻荷大明神というのがあります。伝承では、昔、盛淳上人が曾野の一農家を訪れて、一夜の宿を乞われた際、深夜別室で人の叫び声がするのを聴いたので、上人は主人にそのわけを問うと、「当郷には古来年を経た白狐が出没して里人を悩まし悶死さすので、農民が次第に離散し、さびれてしまいました。今宵は私の妻がそれに悩まされているのです」と語りました。そこで上人は可哀そうに思われ祈祷すると、妻は忽ち快癒したので、村人は上人に請うて、田中の社から曾野郷稻荷山に御分身を勧請することにしました。その後この村には、白狐の出没が絶えたといいます。毎年旧二月初午の日には、祭礼があって多くの参拝者で賑います。

曾野の礎石



水田の中に「作石（さくいし）」と呼ばれてきた花崗岩の石があります。この石は1辺2mの四角形で、上面の中央部には径50cmの浅い円形の孔が穿ってあります。古代寺院の塔の心柱の礎石であるとして、「曾野の礎石」といわれていますが、近くに寺院を示す遺構・遺物は全く見られず、そうした伝承もありません。周辺には花崗岩の切り出し場があったとされ、この場所の近くで作られた礎石が残されたという説もあります。仮に寺院の礎石であるとすれば、寺院建築の一端を示すものとなり、瀬戸の古代を考えるうえで貴重な史跡です。

八幡神社（上水野）



上水野村の村社で、祭神としては、神功皇后・成務天皇・応神天皇が祀られています。創建については明らかではありませんが、延宝4年（1676）12月20日尾張藩主光友によって再建されたとされます。明治5年（1872）村社となり、大正6年（1917）9月30日に同村に鎮座する山神社3社を合祀しました。例祭は毎年10月15日直前の日曜日に行われます。

一色山城跡



水野地区には古城跡として入尾城、大平山城、シンド山城、一色山城が所在したとされていますが、現在も遺構が確認できるのは一色山城のみです。県道定光寺山脇線の西側の丘陵内にあり、標高 240 m の尾根上に幅 30 m、長さ 120 m の平坦面が確認できます。堀切や中段に小曲輪なども残っています。

地誌類によれば鎌倉期の水野氏の居城とも戦国期の磯村左近の居城ともされています。磯村左近は織田信秀（信長の父）に仕え、天文 3 年（1534）に落合城の戸田家光と余床で戦って戦死したとも伝えられ、地元にはその落城にまつわる伝説も残されています。

水野焼頌徳碑



水野地区では、江戸時代前期に窯屋が東濃地方等に移住させられて以来、明治維新になるまで窯業生産は行われていませんでした。明治 5 年（1872）以降、上水野村でも本業窯を始めますが幾度も失敗しています。明治 39 年（1906）に、磯村桂太郎・加藤嘉蔵・同民助・同浦吉・同不二松・同鉄五郎・同鉄太郎・松本鎌太郎ら 8 名が協力して登窯を築き磁器製造を開始し、これ以降、上水野村では井や湯呑、小鉢などの生産が盛んになります。この碑はその遺徳を記念して昭和 28 年（1953）4 月に地元の製陶業者 48 名が建立したものです。



穴田第 4 号墳

企業団地造成にともなう発掘調査後、現地に復元保存された古墳です。墳丘は東西 13 m、南北 14 m で、方形に近い形をしていました。石室は横穴式石室で、玄室（棺を入れる部屋）の長さは 3 m、幅は奥壁で 1.03 m です。玄室の平面形は胴張形で、玄室と羨道の境は立柱石により区画されています。古墳にともなう遺物としては、須恵器の高坏、坏身、鉄鏃、金環が出土しており、須恵器の年代から 7 世紀前葉から中葉に築造された古墳であることがわかりました。



石樋（市指定名勝）

定光寺・山脇線に沿う水野川の支流樋ヶ沢川の河床に、幅 10 ～ 15 m、長さ 60 m にわたって「石樋」と呼ばれる景勝地があります。これは河川が長い年月をかけて花崗岩盤を樋のように浸食したもので、方状節理といわれる自然景観です。ここは江戸時代から名勝地として知られており、『尾張名所図会』には「細流此所を経るに、大磐石の面に樋の如くなる窪みありて人工にうがちたるが如し、此の上を流るゝ水千筋に分かれほとばしるさま又なき一勝景なり」と書かれています。



マメナシ（市指定天然記念物）

マメナシはバラ科に属し、ナシの原種といわれ、4月上旬に白い花を開花させ、秋には豆粒大の実を結実させます。この樹木は更新世からの遺存植物で、世界的にも希少な植物です。日本では本州中部のきわめて狭い地域に分布が限られ、愛知県では主に尾張東部に分布していて、瀬戸のマメナシはその東限となっています。かつては湧き水のある場所に多く見られましたが、現在、市内の東松山町から進陶町の群落もわずか数本を残すのみとなっています。地元では「せとマメナシ観察会」が結成され、保護活動を積極的に行っています。



陶器



石器



創造



街



交流



自然



祭り

穴田窯跡



穴田窯跡は江戸時代前期の窯跡で、現在までのところ、4基の連房式登窯が調査され、未確認のものを含めると6基の窯が存在すると考えられています。第1号窯は燃烧室と11房の焼成室が確認されており、有段斜め狭間の構造、第2号窯は燃烧室と焼成室15房の有段斜め狭間構造の窯で、燃烧室に奥壁と一体となった分炎柱がある特徴的な構造を持っています。第1号窯から出土した敷瓦は、定光寺源敬公廟（国指定）の焼香殿に使用されたものと同形で、江戸時代初期の窯屋と尾張藩の関係を知らうえて貴重な窯跡となっています。

昔田窯跡



昔田窯跡は昭和43年（1968）に市内で最初に発掘された戦国時代の大窯です。窯体は3基あり、古瀬戸後期末から大窯の初めにかけて、窖窯から地上式の大窯への変遷を知ることができます。昔田第3号窯が最も古く、側壁は地面を掘り込んで造る地下式構造で、古瀬戸後期末の窯です。これに対し第2号窯は地上式の構造で、焼成室内には天井を支える支柱がありました。第1号窯も地上式構造で焚口と燃烧室には石材が使用され、分炎柱の奥には左右各7本の小分炎柱と昇炎壁がある、典型的な大窯構造の窯でした。戦国期における窯体構造の変遷を知らうえて貴重な窯跡です。



① 御林方奉行所跡 (P77)

② 北脇の大掠 (P77)

③ 感応寺 (P78)

④ 曾野稻荷社 (P78)

⑤ 曾野の礎石 (P79)

⑥ 八幡神社 (上水野) (P79)

⑦ 一色山城跡 (P80)

⑧ 水野焼頌徳碑 (P80)

⑨ 穴田第4号墳 (P81)

⑩ 石樋 (P82)

⑪ マメナシ (P83)

⑫ 穴田窯跡 (P84)

⑬ 昔田窯跡 (P84)